

聖霊降臨後第5主日（特定9） マタイ11章25―30節

〔直訳〕

- 25 その時において 答えて イエスは 言った、  
「私は賛美する あなたを、父よ、 天と地の主よ、  
というのは  
あなたは隠した これらのことを 知者たちと賢者たちから、  
そして あなたは現した それらのことを 幼子たちに。  
26 そうです 父よ、  
というのは  
このように 気に入ることで それはあった あなたの前で。  
27 すべてのことは 私に 渡された 私の父によって、  
そして 誰もない 知る 子を  
父以外は、  
またない 父を 誰も 知る  
子以外は そして ところの者 望む 子が 現すことを。
- 28 来なさい 私のもとへ  
すべての 疲れた者たちと重荷を負う者たちは、  
そして私は 休ませるだろう あなたがたを。
- 29 取りなさい 私の軛を あなたがたの上に そして 学びなさい 私から、  
というのは 柔和で 私はある そして 低い 心において、  
そして あなたがたは見いだすだろう 休みを あなたがたの魂に。
- 30 なぜなら 私の軛は 心地よい  
そして 私の荷は 軽く ある。」

〔新共同訳〕

- 25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。26 そうです、父よ、これは御心に適うことでした。27 すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父を知る者はいません。28 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。29 わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。30 わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

①言葉の解説

Ⓐ 「私は賛美する」

イエスは旧約聖書にもユダヤ教にも典型的な祈りの言葉を用いて神を賛美する（ダニ二19―23、詩七五2、一一一1、二三八1、シラ五一1）。ダビデはすべての敵の手から救い出された日に、神を賛美した（サム下二二50、詩二八50）。しかし、イエスはこの賛美の直前で、今の時代の人々が洗礼者ヨハネの到来やイエスの到来を無視したことを批判し（一一16―19）、イエスの行った奇跡を見ても悔い改めない町を叱っている（二一20―24）。イエスはダビデのように敵の手から救い出されたときではなく、自分を拒絶する敵に囲まれた中で神を賛美する。

Ⓑ 「知者たちと賢者たち」

イザヤ29章14節には「賢者の知恵は滅び、聡明な者の分別は隠される」とある。また、詩編19編8節には「主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える」と述べられている。神が知者や賢者には知恵を隠し、価値のない者や取るに足りない者に与えたという思想は、ユダヤ教の知恵に関する思想に基づいている（知一〇21参照）。

Ⓒ 「気に入ること」

この語は、「気に入る・喜ぶ」を意味する動詞から派生した名詞。名詞形はマタイに一回しか現れないが、動詞形は三回用いられている。以下の用例で「心に適う」と訳された言葉がこの動詞である。

⑦ イエスの受洗の際に、天からの声が、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と告げる（三17）。

⑧ イエスの変容の際に、雲の中からの声が、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と告げる（一七5）。

⑨ 「見よ、わたしの選んだ僕。わたしの心に適った愛する者」（一一18）

これらの用例はいずれもイザヤ42章1節と関係している。イエスは「神が気に入った、愛する者」であり、それはイザヤ書の預言の成就とみなされている。さらに、12章1―14節は、イエスとファリサイ派との対立を述べており、安息日論争に破れたファリサイ派の人々は「出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した」とある（二二14）。それを知ったイエスはそこから立ち去り、「皆の病気をいやして」、自分のことを言いつらさないように戒める（二二15―16）。自分を殺そうとする者との争いを避けて立ち去り、病気を持つ者をいやすイエスの活動も、イザヤ42章1―4節の成就としてマタイでは理解されている。また、18節「彼は異邦人に正義を知らせる」と21節「異邦人は彼の名に望みをかける」によって、マタイは異邦人伝道も預言の成就として捉えていることが分かる。

Ⓓ 「疲れた者たちと重荷を負う者たち」

25節の「知者たちと賢者たち」は、イエスが神を現す者であることを認めないファリサイ派の人々を指している。「疲れた者たちと重荷を負う者たち」とは、ファリサイ派の人々が主張する律法遵守の教えに押しつぶされた人々を指している。

Ⓔ 「休ませてあげよう」

この動詞から派生した名詞（「休み」）が29節に用いられている。シラ51章26―27節には「軛

の下にお前の首を置き、魂に教訓を教え込め。知恵はすぐ身近にある。目を開いてみよ。わずかな努力で、わたしが多くの安らぎを見いだしたことを」とある。このように、ユダヤ教の知恵文学では擬人化された知恵が「安らぎ」を与えると述べられているが、マタイでは「安らぎ（休み）」を与えるのはイエス自身である。

⑧ 「軛」

「軛」は、もともとは家畜の首にかけられる曲がった木材を指す。そこから奴隷としての奉仕や民に要求される服従を表し、抑圧のシンボルとなっていく。しかし、知恵文学の一つであるシラ書では、知恵の前にひれ伏して教えを乞う態度が「軛を負う」と表現され（五一・26）、「若いときに軛を負った人は、幸いを得る」（哀三・27）という一般的教訓にもこの語が用いられている。またエレミヤ2章20節では、民が神の前にひれ伏して教えを乞うという態度が「軛」と表現されている。さらに、「神の軛」を言い換え「トローラーの軛」と表現し、神の意思の表れである律法の前にひれ伏して教えを乞うという意味で用いるようにもなった。イエスが与える「軛」は抑圧ではなく、神の命への解放につながっている。

⑨ 「柔和な」

「柔和な」と訳されるギリシア語はプラウユス。プラウユスは、七十人訳旧約聖書では、「貧しい者」を意味するヘブライ語の訳語である（詩二五・9、三七・11他）。ヘブライ語の「貧しい者」は、「圧迫されて身を屈めている」ことを表す語（アーナー）に由来する。旧約聖書では、神が貧しい者の権利を守るが、そこに神の義が現れる。神は貧しい者の叫びを聞き、彼らの権利を守り、彼らを自分のものとする。それゆえ、「私は貧しい」と述べて、苦しみを訴えることは、神に信頼し、神の憐れみが現実になるようにと願うことを意味した（詩一〇九・22、二五・16）。そこから「貧しい者」は神に信頼する「貧しい、敬虔な者」、さらに「謙遜な者」の意味にもなっていた（民一一・3）。

⑩ 「心において低い」

箴言16章19節に「貧しい人と共に心を低くしている方が、傲慢な者と分捕り物を分け合うよりよい」とある。「心を低くすること」は「貧しい者」の在り方である。ヘブライ語に遡って考えれば、「貧しい者」と「柔和で」とは同じ言葉（アーナー）にたどり着く。「心において低い」とは、圧迫されて身を屈める苦しみの中で、神に信頼して身を低くすることを意味する。イエスはまさにそのような方である。

②言葉の対応から見た文章構成

① 25 | 27節を見ると、囲み野で示したように、合計5回「父」という語が現れる。次に28 | 30節を見ると、「父」という語は一度も用いられず、代わりに「あなたがた」という代名詞が目につく。28節3行目と29節1・3行目に「あなたがた」とあり、29節の「取りなさい」と「学びなさい」は二人称複数形であるから、「あなたがたは見いだすだろう」と同様に、「あなたがた」が主語である。

② 「父」という語が25 | 27節に集中し、「あなたがた」が28 | 30節に繰り返されていることに注目すれば、25 | 27節を前半、28 | 30節を後半として二つに分けることができる。前半では25節に「父よ」とあるように、父への語りかけであり、後半では「あなたがた」への呼びかけになっ

ている。ここでのイエスは、「父」と「あなたがた」との間に立って、人を神に取り成す仲介者としてのイエスである。

#### 第一段落（25—27節）

㉔ 25節では、知者や賢者には「これらのことを隠した」が、幼子たちに「それらのことを現した」と述べられている。知者や賢者には隠し、幼子には現した「これらのこと」が何を指すのか、二つの解釈が可能である。

㉕ イエスが神を現す者であるということ

㉖ 天の国の秘密（一三11「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されている」）

どちらの解釈も可能であるが、26—27節に、イエスこそが神の啓示者であるということが述べられていることを考えると、㉕のほうがよいかも知れない。イエスが神を現す者であることを神が隠した「知者や賢者」とは、文脈から見ると、イエスを認めることのできないユダヤ人、特にファリサイ派の人々を指している。他方、イエスが神の啓示者であることを神が現した「幼子たち」とは、27節5行目から見て、イエスが神を「現すことを望むところの者」のことである。

㉗ 「神が隠した」から、ユダヤ人はイエスを拒絶する。この時代は、イエスをメシアと認めず（一16—19）、イエスの行う奇跡を見ても悔い改めない時代である（二20—24）。しかし、イエスはユダヤ人から拒絶されても、神を賛美する。ユダヤ人の拒絶は「神が隠した」ためだと知っているからである。それゆえ、イエスは「そうです、父よ」と述べて、神の業に対する確信を表明する。そして、「知者や賢者には隠し、幼子たちには現す」ことは、「あなたの気に入ること」とであると述べて、それが神の意思であることを明らかにする。

㉘ 27節はイエスが父を啓示する者であることを明らかにする。「すべてのこと」とは、父の言葉であり、振る舞いであり、人間に対する思いであり、それらすべてのことが父からイエスに渡されている。27節二行目以下では、「…以外は誰も知らない」という構文を繰り返すことによって、父と子の関わりの深さが述べられている。特に5行目では「子」だけでなく、「子が現すことを望む者」も父を知ることができる」と述べられている。父なる神を人に知らせることができるのは、子であるイエスだけである。

#### 第二段落（28—30節）

㉙ 28節1行目と29節1行目は、「来なさい」と「取りなさい・学びなさい」というように命令形に対応している。また、28節3行目と29節3行目は「休ませるだろう」と「休み」という同族語に対応する。28節2行目には、イエスが呼びかける相手が登場し、29節2行目では、イエスが誰であるかが書かれている。「柔和で、心において低い者」であるイエスが、「すべての疲れた者や重荷を負う者たち」に、「私のもとに来なさい」、そして「私の軛を取って、私から学びなさい」と呼びかける。イエスは「休ませ」、人々は「休み」を見いだせるからである。イエスの軛が軽くて、心地よいのは、イエスが共に担ってくれるからである。

③ 神の思いを知っているイエスのもとの来る

① イエスは神を賛美し、全幅の信頼を寄せて「父よ、天と地の主よ」と呼びかける。しかし、イエスはユダヤ人から拒絶され、神への賛美とはおよそ遠いと思われる状況に置かれている。11章17節には

今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった』

とある。これは、「結婚式（マテ）」とか「葬式（マテ）」への誘いが無視されたことをなじる子供の遊び歌である。この歌を引用することによって、洗礼者ヨハネとイエスが告げた天の国の到来を人々が無視していることを表している。また、11章20―24節では、イエスは奇跡を見ても悔い改めなかった町を叱りつける。コラジン・ベトサイダ・カファルナウムはイエスのガリラヤ宣教の中心地であった。イエスはユダヤ人から拒絶されている。しかし、この拒絶は「知者と賢者には隠す」という神の「気に入ること」だとイエスは知っている。イエスはそれを知るから、拒絶の中にあっても賛美の祈りをささげることができる。

② イエスが神の意思を知っているのは、イエスは神を現す者だからである。そのことが27節では「すべてのは私の父によって私に渡された」と表現されている。父を知るには、すべてを神から託されているイエスを通るほかに道はない。だから、イエスが「現すことを望む者のほかに、父を知る者はいない」と言われる。

③ 御父が「気に入ること」を知っているイエスは確信を持って、重荷を負う「あなたがた」に呼びかけ、「休ませるだろう」と語る。ここでの「軛」とは、人間が生きるようにと神が与える指示にひれ伏して教えを乞うという態度のことである。ユダヤ教指導者もそのような意味での「軛」として律法の遵守を求めていたのだろうが、それは「抑圧としての軛」となってしまった。律法を実行していると誇る彼らから見れば、律法を果たせない弱い者は救いから除外されるべき者であった。こうして、彼らが教える「軛」は神と人とを連結するものとはならず、むしろ圧迫としかならなくなった。

④ このように重荷を担うことに疲れた者たちにイエスは「私の軛を取りなさい、私から学びなさい」と呼びかける。「柔和で、心において低い」者とは神の憐れみに信頼し、自己の強さを誇らない人のことである。イエスが示したこの生き方にこそ、安らぎがある。神の思いを知っているイエスのもとの来るなら、圧迫に打ちのめされたり、「疲れた者」とはならない。「柔和で、心において低い」イエスが神の思いを知らせてくれるからである。

④ ゼカリヤ9章9節

娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者

高ぶることなく、ろばに乗って来る  
雌ろばの子であるろばに乗って。

④ゼカリヤ1―8章は、さまざまな幻によって神殿再建の必要性を説いており、前五二〇年代の預言者の言葉。しかし、9章以降は語彙に違いがあり、別の預言者の言葉だとされる。そこで、9章以降を第二ゼカリヤと呼んで、8章以前とは区別する。

⑤「娘シオンよ」。直訳は「シオンの娘よ」。名詞バト（娘）が地名と共に使われると、その地が人格化されると共に、その地の住民を指す。

⑥「歓呼の声をあげよ」。動詞ルーアの命令形。この動詞は戦いに伴う喚声を表すが、宗教的な喜びにも使われる。

⑦「見よ」。ここでは、「確実に到来する未来を荘嚴に宣言する」ために使われている。ここでの「あなた」は「娘シオン＝娘エルサレム」を指すから、シオン（エルサレム）とその住民のために「王が来る」という未来が荘嚴に宣言され、それに基づいて「大いに踊れ。：歓呼の声をあげよ」と呼びかけている。

⑧「神に従い」。直訳は「正しい」。この「正しさ」は「神との関わりにおける正しさ」であるから、新共同訳は「神に従い」と訳している。

⑨「高ぶることなく」。直訳は「貧しい」。「圧迫されて身を屈めている」を意味する動詞アーナーから派生した形容詞アーニーが用いられている。ここでの貧しさは心の姿勢を表しており、「柔和」とか「高ぶらない」と訳されている。そこで、彼の乗る動物も「馬」ではなく、「ろば」になる。しかも、「ろば」を説明して、「雌ろばの子であるろば」と言い換えているから、これは「ろば」といっても「雌ろばの子」のろばだと強調していることになる。この「雌ろばの子」は創世記49章11節の用例から考え、王がもたらす恵みの豊かさを表現すると思われる。

⑩ゼカリヤが預言するメシアは、「貧しく、へりくだる」王であるが、これはそれまでのメシア預言には見られないイメージである。メシアは「勝利を与えられた者」とあるように、自力で勝利を獲得したのではなく、神によって勝利を与えられる。

### ⑤ イエスが与える安らぎ

⑪第二ゼカリヤが預言したように、イエスは「柔和で、心において低い」メシアである。イエスは人々から理解されず、非難を受けるときにも、それは「神が気に入ること」であると信じ、神を賛美する。イエスが「圧迫されても身を屈めている」ことができるのは、その苦しみには神の計画があると信じているからである。神への信頼がイエスを「苦しみの中で身を屈め、心を低くして神の思いを聞く」者とする。

⑫イエスが示す「柔和」とは単なる「優しさ、穏やかさ」ではなく、神への信頼から生まれる「折れることのない心」である。そのイエスは「私から学びなさい」と命じる。「イエスから学ぶ」ことは、「柔和で、心において低い」こと、「折れることのない心」である。ファリサイ派が与えた軛は人々を圧迫し、苦しめたが、イエスの与える軛は「安らぎ」をもたらす。神が自分たちを捨て置くことがないと信じる者には、律法は神が共にいるという「安らぎ」の中で、神によって行うものとなるからである。